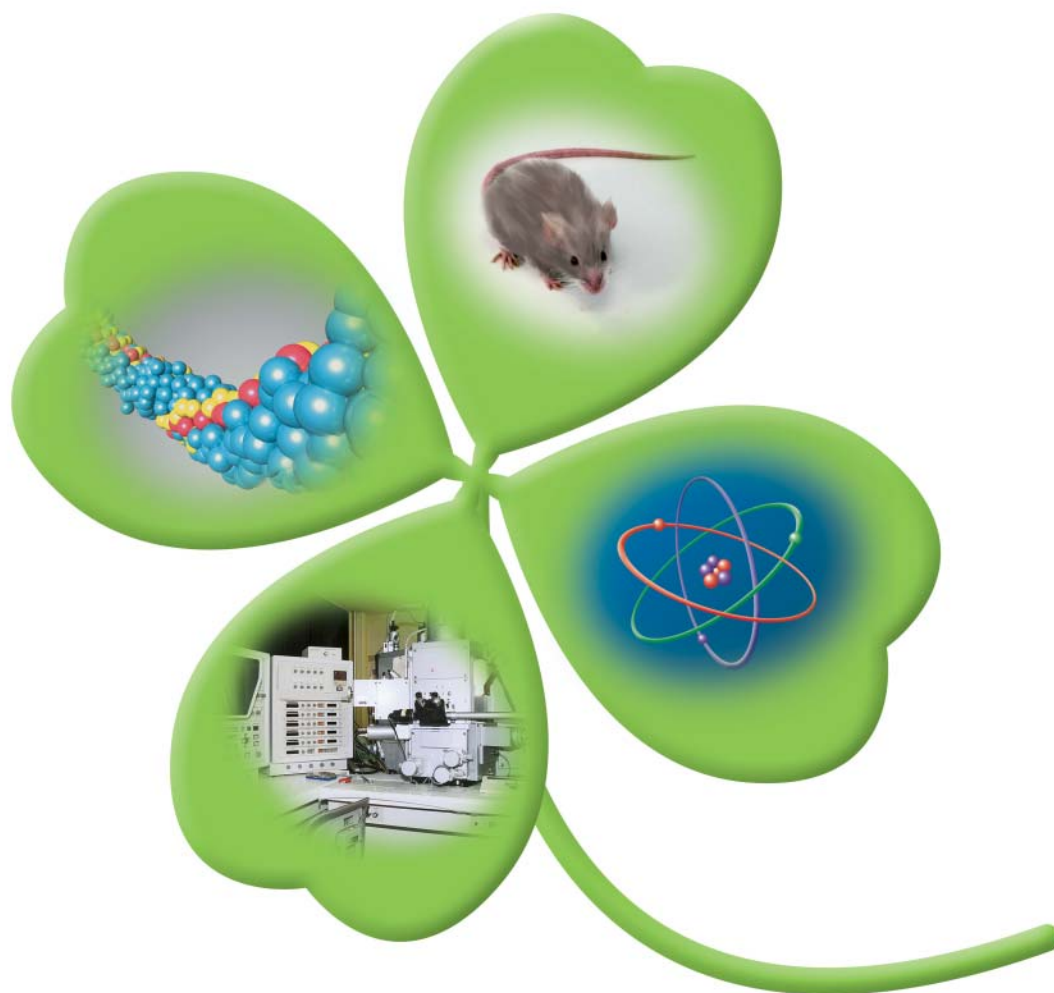


金沢大学
学際科学実験センター年報

2005

第 3 号



Annual Report No.3
Advanced Science Research Center
Kanazawa University, 2005

は じ め に

学際科学実験センター長 山 口 和 男

金沢大学学際科学実験センターは、発足後早や4年目、法人化後で3年目に入りました。学内外の皆様のご支援、ご協力をおもちゃまして、各施設の運営体制もどうにか軌道に乗り、落ち着きを取り戻しております。ここにセンター年報第3号をお届けすることができました。どうか忌憚のないご批判をお願いすると共に、今後のセンターの発展にご理解のほどを切にお願いする次第です。

本センターの役割は学内外の「教育・研究支援」とセンター独自の「研究推進」であり、それは車の両輪のごとくどちらも疎かにできないと、これまで機会ある毎に申してきました。この3年余りの活動がどうであったかは、皆様の評価を待たねばなりません。後者については、嬉しいことを一つご報告させていただきます。それは科学研究費の採択についてです。科研費の選考方法に問題が多々有るかとは思いますが、客観的な研究評価の一つであることは間違いないでしょう。本センターの採択数（新規+継続）はこの3年間、4件（専任教員数9名）、7件（同11名）、13件（同12名）と順調に増加してきました。今年度の場合、全部局を通じて初めて教員1人当たりの採択数が1を越えました。特に嬉しい事は、センター設置に伴い、純増1名に加え、全学からのご支援により2名、計3名の教員増が認められ、結果的に3名の若手研究者（助手）が新たに着任しましたが、今年度はその3名全員が採択されたことです。これもセンターが全学のご支援に答える一つの形であると思っています。

先端的で高度な「教育・研究支援」とは、その内容が常に変化を遂げることを意味します。これまでの私達の経験から、普及を図る必要があると判断される新たな研究手法・技術は、必ずしも日々の自分達の研究の中で必要であるとは限りません。そこで時にはそのような研究手法・技術に自分達の研究内容を合わせることもありました。しかしそうではあっても、自分達が研究の最前線に身を置かない限り、新しい研究手法・技術を普及させていくという本センターの任務は果たせないと考えています。初めに本センターの役割に「教育・研究支援」と教員独自の「研究推進」の両立が欠かせないと書きましたのはそのような理由からです。その意味で、センターの特に若手の研究者が元気に「研究推進」を担っていく姿は、今後の本センターの発展のためにも大変頼もしいものです。幸い、2005年度は学内だけでも22の研究室と共同研究を実施してまいりました。皆様には、どうか本センターを単なる実験場所ではなく、ご自分の研究推進のためのパートナーの一つと考えていただきたいと思いますし、またセンターもそれに応える努力を続けていきたいと思っております。今後ともご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

2005年度学際科学実験センター一年報

目 次

はじめに

I センターの概要	1
1. 理念・目標	1
2. 設立の経緯	2
3. 組 織	3
II センターの事業報告	4
III 研究分野・領域の研究教育活動状況	17
遺伝子改変動物分野	17
ゲノム機能解析分野	22
トレーサー情報解析分野	27
機器分析分野	35
革新脳科学プロジェクト研究領域	41
IV 研究施設の活動状況	48
実験動物研究施設	48
遺伝子研究施設	53
アイソトープ総合研究施設・アイソトープ理工系研究施設	56
機器分析研究施設	72
学際科学実験センター利用業績一覧	74
付 録	97
職員名簿	97
各種委員会委員名簿	98
諸 規 程	99
設備機器一覧	109

